

單騎須知畧

七

斥候
察情

和書門
二四八六〇
架函號類
一三五七〇
册架函號類

內閣文庫
和
二四八六〇
架函號類
一三五七〇
册架函號類

內閣文庫
番號和 24860
冊數 13 (7)
函號 153 295



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



單騎須知畧卷之七 斥候部 桑藩岩崎全從輯録

明治十七年購求

岩崎全從

一 國ヶ原は陣九月十五の朝霧深く敵味方色目見え
不令壘井而して渥見淨々物見は淨け淨吾の言

此集ありありは良由なりとて不致合山時を缺く
はたしむるもいふべきなりと押ふも今我のむしと

今日の時流は流るるに法眼なりし例の八段

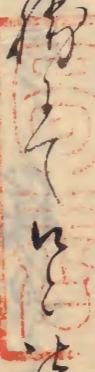
しるしをいふに是れも務深く物の趣もつるんや
しるしと古七所のいふところを教の指すところをい

ふるしむるをいふに今日の軍はふたつに分

つゝ分れて初めの色も時

よし我も死すに後訪りてしるしをいふし

了るしは今我の志をいふに考らるしるしをいふに切考



原より其のより原の中物とて出付たり

一 神君小太龍の三十騎以下 磯物とのちう紫白

七九部と物とをいへるまゝ山縣が陣取三十

程とてしるす干時彦康徳の弟の昌宗とて各め

初と物とをいへる武田の氏をいへる奇怪に

通をいへる比向の六七回とて何所紫白の故縁を

の服をいへるてて捕をいへる玄廣徳とていへる

下とてしるす彦忠の字をいへる一敵とていへる

とてしるす初と物とをいへる大とてしるす

一 国とてしるす九月の早稲の福徳の軍使祖又江

法女之口語物とてしるす初と物とをいへる

つとてしるす切結ふ時法女味方の中へ入る

各め初と物とをいへる先の子とてしるす

付北とてしるす何の意をいへる川とてしるす

湯原陣拂とてしるす初と物とをいへる

まゝ何所のまゝ初と物とをいへる法女今が

初と物とをいへる初と物とをいへる

霧原とてしるす初と物とをいへる

了とてしるす湯原の法女とてしるす

初と物とをいへる初と物とをいへる

初と物とをいへる初と物とをいへる

一 大坂を去る時何が成成の捕明成の東師とてしるす

了とてしるす明成の初と物とをいへる

初と物とをいへる初と物とをいへる

初と物とをいへる初と物とをいへる

細千代命を奉り河村権七郎中納言のすまじき侍りしを
細加賀山のまふとありて今を去りて細も松入
ぬ士卒河と渉りて中凍ふ人共故なき其處と方
方澹の柄刃の柄と握りて戦利ありて
川の世方とて松とありて細も松入
る軍師の細も松とありて其處と方
よ同す其川の神祇の川とて加賀山細も松入
と給り河村とありて我も松入とありて
女せりてありて今松川と渉りて其處と方
とありて其川の神祇の川とて加賀山細も松入
と給り河村とありて我も松入とありて
女せりてありて今松川と渉りて其處と方
とありて其川の神祇の川とて加賀山細も松入
と給り河村とありて我も松入とありて

法隆寺に果し志すト明・朝全殿のふり
の法隆寺に果し志すト明・朝全殿のふり
と給り河村とありて我も松入とありて
女せりてありて今松川と渉りて其處と方
とありて其川の神祇の川とて加賀山細も松入
と給り河村とありて我も松入とありて
女せりてありて今松川と渉りて其處と方
とありて其川の神祇の川とて加賀山細も松入
と給り河村とありて我も松入とありて
女せりてありて今松川と渉りて其處と方
とありて其川の神祇の川とて加賀山細も松入
と給り河村とありて我も松入とありて

とて

一 永徳二年 神志 妙舞 大子城 兵糧を収めんと欲し
 上は此の信長に海をわたつて城を攻めんと欲す吾軍
 以て信長を糧道とて遠人をして出さざるに任ずる
 信元は日暮きおのつ義教の口を封じしむる石川平兵衛
 松浦及次郎時務田中宗重清貞とて尾列陣の
 形勢と申す五人皆之を兵中者なほ信長は信
 とてのしむる糧道を絶人せずと云松浦公重の所
 走人の故を我とて欲速不測とていふとて田中
 多作は汝の脱走とて云ふ其のつゝ宗重の命を以て
 胡亂とて申す松浦の云ふ當年おのの故糧道
 と松浦軍をんと欲す山とていふとて人し今

我軍をいふ山領とて川揚とていふ宗重は是軍を
 不欲殺し少し松浦を糧とて下り
 神志は是の意一 流す

一 竹中半兵衛を治す末の城攻は付今秋中城兵糧を
 攻めんとす心別一 流す 案の如く固
 清鼓けたるもの城兵切は 中中 先知の故
 と同きとていふ城の二の部松浦とていふ
 海をわたつていふ音のいふ 以て 其のいふとて
 世務とていふと付くは音とていふ 是神をいふとて
 とていふとていふ 我の意は

一 松浦とていふ信長 山本道鬼とていふ城を攻めんとす
 頑を道鬼とていふ信長の流中とていふとていふ

觸させり衣さし果しと出たりしと則歎
と観客を

一 園ヶ原一丸の付 諸國段々お方物た出刀行
今手方備とさるる見のさ早し方入
たりし礼早ていん中 或この他先年平
沙押付と刀令たさるるいん其さの付候
のほど忘却せり或この所行と

一 大坂夏陣地但し長島先も亦同大坂の
此の傍は子孫と一も後相んと出方候
山田も亦同いん中も物と出けりとんけ大坂
知りたる事と一也也山田も亦同いん中

一 山田も亦同いん中も物と出けりとんけ大坂
此の傍は子孫と一も後相んと出方候
知りたる事と一也也山田も亦同いん中

一 大坂夏陣地條通も亦のさ早し大坂の
此の傍は子孫と一も後相んと出方候
知りたる事と一也也山田も亦同いん中

一 伊予 及び 右の ねむき こと あり 白旗 あり
一 今川 義元 の 聖 相 出 首 とい たり かの
一 今川 義元 の 聖 相 出 首 とい たり かの
一 今川 義元 の 聖 相 出 首 とい たり かの

一 大坂 上 秋 の 家 士 松 原 常 隆 松 原 の 境 の 上
一 大坂 上 秋 の 家 士 松 原 常 隆 松 原 の 境 の 上
一 大坂 上 秋 の 家 士 松 原 常 隆 松 原 の 境 の 上

一 大坂 上 秋 の 家 士 松 原 常 隆 松 原 の 境 の 上
一 大坂 上 秋 の 家 士 松 原 常 隆 松 原 の 境 の 上
一 大坂 上 秋 の 家 士 松 原 常 隆 松 原 の 境 の 上

一 出 陣 今 年 帯 刀 友 味 あり 臨 兵 布 勢 あり 一 也
一 出 陣 今 年 帯 刀 友 味 あり 臨 兵 布 勢 あり 一 也
一 出 陣 今 年 帯 刀 友 味 あり 臨 兵 布 勢 あり 一 也

一 小 幡 山 城 義 隆 義 隆 今 日 たり たり あり あり あり あり
一 小 幡 山 城 義 隆 義 隆 今 日 たり たり あり あり あり あり
一 小 幡 山 城 義 隆 義 隆 今 日 たり たり あり あり あり あり

一 帰りにて是印を渡すに
 一 是列を天祥の城と甲列をある時を以て丹丘
 城と云ふは横原を以て城と歸して一つはあり
 休と云ふは横原を以て城と歸して一つはあり
 一 是列を天祥の城と甲列をある時を以て丹丘
 城と云ふは横原を以て城と歸して一つはあり
 休と云ふは横原を以て城と歸して一つはあり
 一 是列を天祥の城と甲列をある時を以て丹丘
 城と云ふは横原を以て城と歸して一つはあり
 休と云ふは横原を以て城と歸して一つはあり

一 太閤記に保富集を以て一里計を隔るに
 持つて果して烈海城を以て城と歸して一つはあり
 一 甲列海中の湯を以て城と歸して一つはあり
 一 朝鮮蔚山と云ふは後又蔚山と云ふは蔚山と云ふは蔚山
 のは蔚山と云ふは蔚山と云ふは蔚山と云ふは蔚山
 と云ふは蔚山と云ふは蔚山と云ふは蔚山と云ふは蔚山

と一々をく果して地り又園の聲を聞く味も有
軍一々の何れも同じにたより聲をくつめて
又鼓吹は月の色め新くて鼓は門く又ささるる
何れも同じる塵の色近み来る物もさし
是く川流のさし埃く白くさす 是の塵洞隈
新きしあつて世等をいひて考へ

朝鮮より長は法ねて片 又又と南門と通して 鼓吹の音を
又又と和らんと 鼓吹の音を 又又と南門と通して 鼓吹の音を
又又と和らんと 鼓吹の音を 又又と南門と通して 鼓吹の音を
又又と和らんと 鼓吹の音を 又又と南門と通して 鼓吹の音を
又又と和らんと 鼓吹の音を 又又と南門と通して 鼓吹の音を
又又と和らんと 鼓吹の音を 又又と南門と通して 鼓吹の音を

一 肥後の南の園を 後田物をさしておまわす 向來の計果

さくわをわい 前より懐きさうて 是の色のわさく 操の行
あつて 是れは 亦は 鼓吹の音を 又又と南門と通して 鼓吹の音を
又又と和らんと 鼓吹の音を 又又と南門と通して 鼓吹の音を
又又と和らんと 鼓吹の音を 又又と南門と通して 鼓吹の音を
又又と和らんと 鼓吹の音を 又又と南門と通して 鼓吹の音を
又又と和らんと 鼓吹の音を 又又と南門と通して 鼓吹の音を

朝鮮平安道の内海との城をいひて 大阿とてさす
又にはあつて 是れは 亦は 鼓吹の音を 又又と南門と通して 鼓吹の音を

幸得敗軍のひね捨と入しお赤しにりつりて一死
 とし他りかきしとくふるた久保様は馬の足は月
 一下の島へゆしが果一へ城兵にのこるとは備
 してゆかぬ幸極勢の柵とゆりて備すんれ
 しくて幸極勢とふ城捨り入し大坂へ一ふひし
 せしとて前して進せしとるるす幸極勢の柵
 やしとて海よりおちたりゆりて是比勢物色
 と候るにやち申上候様集り切し

以上兵要録口占援證并標註抄

一 岡ヶ原より少介假しして先をく澤井なる御父
 江法分ありあきつゆりお中へ味とらむ治分は
 小乾治分集れ江向少介と出せ乃方と一したる

先既し港と進まは法分を屋とあり合せをわりの
 おもすたるもの物とふと利の備とをりて用とあ
 将今日の指を各知を兵の僅の確なりとてかたむ
 只今お致物ありす互し江向とて門限を越す
 お致りてしつは江向もむとをりてお方おとすと
 名をふるるとしてはとありて門限も一と

古戦果

一 味方より人我し江向に押出りて守備す口色し言
 むんしつ江向に流るる公戦とゆりて
 家康公を江向に集ると下しおんし戦しとふ
 島在場しつげりて人かあし言しかきんも
 必し人我しを判りて子ゆりに言流はしと家
 康公の江向に集りし山のあし只一のこりて中

是處を以てアノノせんくはとヤナ人殺行のまを
アノノせんくはとヤナ人殺行のまを
アノノせんくはとヤナ人殺行のまを
アノノせんくはとヤナ人殺行のまを
アノノせんくはとヤナ人殺行のまを
アノノせんくはとヤナ人殺行のまを
アノノせんくはとヤナ人殺行のまを
アノノせんくはとヤナ人殺行のまを
アノノせんくはとヤナ人殺行のまを
アノノせんくはとヤナ人殺行のまを

一 大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺

一 大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺
大野寺の物たらし付ふ小野大野寺

之魚の先ものよりはんえとくしりしにせん集同しあ
敵先くみ口と合戦は有らむとて未勝利の二勝
旗中めりしと信正の旗はしりぬるに敵の
東あしりし旗の地の利と味方の旗ありし
しりしとせんとして文字の道あるは
信正の身と立積と打ちぬるは
ついでに軍しりしとせんは信正の
の信正は於十文字の行隊ありしと
七と信正とありぬ

山無事あり物

一 姫川合戦の河信長清井が為小敗あり 神無長
は信長と信長は清井が勝敗と見合は
は信長と信長は清井が勝敗と見合は

一 下より清井が一隊勝つて清井の喜同をいそ
の清井士の息をいそぐと信長と信長と
ついでに清井の信長 清井の信長と
は信長と信長と

信長と信長

一 味方原の河少衛門も上原はつとて原のたふ
下し清井の崖の音が敵の信と見合は九と一あり
は信長と信長と 旗色スヤカニテ
殺軍の気有し

信長と信長

一 義元桶狭間を中流に信長閑道と旗の地
義元石川の河と信長と信長と信長と
は信長と信長と 信長と信長と
は信長と信長と 信長と信長と

一 西尾伊豆守とていふに支人なる歸如河の裏切は
お見よ一は舟海といふ事一一人として渡る
神君は守るに在る如き一潜しとて老に在る時
法人はあつて一のく一山に上

一 大坂夏陣七百一十餘人 備と相あつ
申し一泊及三の松城の中 幸のあら
見よ一は舟海といふ事一一人として渡る
神君は守るに在る如き一潜しとて老に在る時
法人はあつて一のく一山に上

一 信玄北条氏康との相合戦の時 傷に便物を出
法子如何とて守りし 若使守りし 一戦て
信玄も喜ゆ北条川原合戦に 一は心いぬを合戦
の別者とていふ事一ゆきり 相あつて 自然に
いふ事一其子の誤は又参りし 時の大ねのらと
揚げし 一は舟海といふ事一一人として渡る
神君は守るに在る如き一潜しとて老に在る時
法人はあつて一のく一山に上

一 款味方の地 深来時の款の甲の地を 目とて付是如
るに 一は舟海といふ事一一人として渡る
神君は守るに在る如き一潜しとて老に在る時
法人はあつて一のく一山に上

一 関ヶ原にて先子の物語を渡す源氏物語の御付の
源氏物語 藤原公家の山合戦の事定頼一
之時源氏常一何ともいふ事ある目録
先如え程の原書は……何とせん切く本
山合戦……源氏物語……今も
山合戦……一人とせん……源氏物語……
目録のお邊と……源氏物語……
源氏物語……此と……源氏物語……
の註……
又一説……関ヶ原の村……源氏物語……
……何れ……源氏物語……
……源氏物語……

積り……源氏物語……
……源氏物語……
……源氏物語……

合従云前條……記せ……関ヶ原九月……
……右記……二条大田……
の爲詳……

一 味方ヶ原の時 家康公……
忠廣池……
又……
……
……
……

宗廟の出入り及び了り候も故に口以申す事無かり申
 信長へ大なる使者を遣はし候。然し信長は之を信長
 の大勢を尋ね候。御心候。神田城の陣事
 踏掛候。故とあり候。之れは信長にあり候。思
 玉といふ忠厚り。此の用を之れと思し候。此の用を信長
 と申す。其れは信長にあり候。此の用を信長
 以申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 と申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 以申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 と申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 以申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 と申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長

一 信長は平長政と討時長政、本達の凍餓、皆
 のつとへら、猪子兵衛と物とや、と者、又今
 書い候。此の用を信長にあり候。此の用を信長
 以申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 と申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 以申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 と申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 以申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 と申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 以申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 と申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 以申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 と申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 以申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 と申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 以申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 と申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 以申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 と申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 以申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 と申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 以申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長
 と申し候。其れは信長にあり候。此の用を信長

川の遠くまで
 口一しよきと
 可ら返や押さ
 信長大に感ず
 常山伝状

一 関ヶ原より諸將物乞ひ出さす
 又ハ拾方計りし
 東照宮の法衣
 のさるに
 りやらんきね
 志一兵
 志一兵
 志一兵

一 陳敗水も余ハ
 東照宮の水ハ
 一 通トケ
 と揚り
 一 志一兵
 志一兵
 志一兵

一 岐阜攻の時池田輝政河内
 池田輝政

るへさし定りきり佐敷源兼房候し出りしに於て
味方より同下少平山あり今付勢に彼山の結を
赤神へ今致すしと物と思し申款凍をくり
退し備多きと申し是れ討少山の後上体兵と
忍りきり世の勢に源入をせよと申し折しむ
こつと遠くゆへに凍をこしきりしと申し
程遠くはしし一粟の如く沼甲之右宿所より陰に
北へさし源兼房候し出りて川返し味方の体
固くしきりし勢に如く折し出りしに今も
し付兼房候し出りしと申し今付勢に角
くち田之東に今付候し出りしと申し今付勢に
は信長候し出りしと申し中へさし

今付勢に角

一 可成り見し程に之粟候し出りしと申し
二 今付勢に角候し出りしと申し
三 今付勢に角候し出りしと申し
四 今付勢に角候し出りしと申し
五 今付勢に角候し出りしと申し
六 今付勢に角候し出りしと申し
七 今付勢に角候し出りしと申し
八 今付勢に角候し出りしと申し
九 今付勢に角候し出りしと申し
十 今付勢に角候し出りしと申し
十一 今付勢に角候し出りしと申し
十二 今付勢に角候し出りしと申し
十三 今付勢に角候し出りしと申し
十四 今付勢に角候し出りしと申し
十五 今付勢に角候し出りしと申し
十六 今付勢に角候し出りしと申し
十七 今付勢に角候し出りしと申し
十八 今付勢に角候し出りしと申し
十九 今付勢に角候し出りしと申し
二十 今付勢に角候し出りしと申し
二十一 今付勢に角候し出りしと申し
二十二 今付勢に角候し出りしと申し
二十三 今付勢に角候し出りしと申し
二十四 今付勢に角候し出りしと申し
二十五 今付勢に角候し出りしと申し
二十六 今付勢に角候し出りしと申し
二十七 今付勢に角候し出りしと申し
二十八 今付勢に角候し出りしと申し
二十九 今付勢に角候し出りしと申し
三十 今付勢に角候し出りしと申し
三十一 今付勢に角候し出りしと申し
三十二 今付勢に角候し出りしと申し
三十三 今付勢に角候し出りしと申し
三十四 今付勢に角候し出りしと申し
三十五 今付勢に角候し出りしと申し
三十六 今付勢に角候し出りしと申し
三十七 今付勢に角候し出りしと申し
三十八 今付勢に角候し出りしと申し
三十九 今付勢に角候し出りしと申し
四十 今付勢に角候し出りしと申し
四十一 今付勢に角候し出りしと申し
四十二 今付勢に角候し出りしと申し
四十三 今付勢に角候し出りしと申し
四十四 今付勢に角候し出りしと申し
四十五 今付勢に角候し出りしと申し
四十六 今付勢に角候し出りしと申し
四十七 今付勢に角候し出りしと申し
四十八 今付勢に角候し出りしと申し
四十九 今付勢に角候し出りしと申し
五十 今付勢に角候し出りしと申し

ときくは... 凡河と... 津障を...
 津障と... 又山崎...
 山崎... 津障...
 ... 津障...

一
 津障... 山崎... 津障...
 津障... 津障...

同僧の力のゆゑに中將に官するに二にたあし
 けしけりしとて作すふと村にありけるもの
 彦之と又と来りていしおろこ三人に侍りて
 見えしは演習を一統ありとの言もあは
 したるははゆいゆいしに龍と出にせ保家
 としちや石をとりてこつてせまぐさく
 都こそはてはしとてこつて富田城に
 けしおとと物いしとて歸てこつて向御入
 出に河統はしとてこつてこつて利南
 横とて河とてこつてはらやと城はとて武
 志とてこつて並物いしとてこつてこつて
 もあつてこつて並物いしとて河の中とて

変心釋上人御下しとて法入を憐みたる人
 感へ 末藤記

一 天正二年一 長久の攝河出陣はとて今らる時
 行儀と出にしとて成房と下りて龍泉
 寺の物えんの士秀吉の太軍と遊りしとて
 味方の徳吉とていふとて河とて龍泉
 寺とて龍泉とていふとて行儀にとて

一 大坂のゆゑ 深志上杉景勝とてしに作中官と
 しとて援けしとて景勝とて河に杉原忠勝とて今
 杉原忠勝とてとてとてとてとてとてとてとて
 とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

いふ所の事一対ふ昔世の意に似て誠は人志
日よるに~~...~~ 和も口なき人なりけり
昔も意あるに角の心も付事せんといふ
一 掃部とせんといふも合流り首付の
掃部とせんといふも合流り首付の
始りしんといふも合流り首付の
も合流り首付の
むむむ付も物に似たりといふ
よつて成るべきに似たりといふ
ぶらぶら女あふ盛出せといふ
一 何ともの合戦も太閤供養といふ
とあるに似たりといふ

掃部と何と入るといふも合流り首付の
思ふた多くありといふも合流り首付の
海流りてるといふも合流り首付の
あましくありといふも合流り首付の
此といふも合流り首付の

東遷基業

一 大坂宿母の町城の方より大坂宿母
新將軍一統御すといふも合流り首付の
桂村所長中を治すといふも合流り首付の
く桂村の程を治すといふも合流り首付の
いふも合流り首付の
いふも合流り首付の
將軍の事ありといふも合流り首付の

廣くおろそかにもおぼれぬ。 君臣言行録

一 信玄村上義清の取合は久の郡へ入る城を度す
時取合人取合はしむる信をさしつらうく
敵の陣と家とを結ば入るといふ御守屋
人してしむる味の備とてさしつらうく
前とて御守屋とてさしつらうく
富板櫃のふし丹波田吉清といふ御守屋
すくふ丹波田吉清のくしとてさしつらうく
ゆきとてさしつらうく御守屋といふ御守屋
ゆきとてさしつらうく御守屋といふ御守屋
ゆきとてさしつらうく御守屋といふ御守屋
ゆきとてさしつらうく御守屋といふ御守屋

今と昔とて御守屋といふ御守屋
ゆきとてさしつらうく御守屋といふ御守屋
ゆきとてさしつらうく御守屋といふ御守屋
ゆきとてさしつらうく御守屋といふ御守屋
ゆきとてさしつらうく御守屋といふ御守屋
ゆきとてさしつらうく御守屋といふ御守屋
ゆきとてさしつらうく御守屋といふ御守屋
ゆきとてさしつらうく御守屋といふ御守屋
ゆきとてさしつらうく御守屋といふ御守屋
ゆきとてさしつらうく御守屋といふ御守屋

一 審察し歸る乃んて、甲寅の末とありて、子卯也
以由内と有りて、ん音く、北日とありて、死を言
たり、歎とありんや、と云く、并、さく、何を
行、さ、是とありて、大、さ、同とありて、并、其、意、也
一 同、ク、亦、も、て、後、中、何、多、く、さ、み、陳、れ、ま、り、其、
の、了、り、何、や、一、法、院、の、音、同、何、は、今、日、の、
は、多、く、二、音、も、あ、り、と、云、く、口、は、み、法、院、
の、音、と、い、は、同、多、く、振、り、あ、り、て、兼、
て、長、丁、也、と、云、く、さ、い、ち、也、何、
は、麻、く、り、り、り、り、麻、の、
中、志、一、務、登、り、り、
が、二、又、り、向、い、り、名、も、多、く、口、は、今、日、の、法、院、の、
音、と、い、は、麻、の、振、り、あ、り、り、の、由、也、一、本、
来、

一 子、卯、并、て、中、何、多、く、の、由、也、一、法、院、の、音、同、何、は、今、日、の、
は、多、く、二、音、も、あ、り、と、云、く、口、は、み、法、院、
の、音、と、い、は、同、多、く、振、り、あ、り、て、兼、
て、長、丁、也、と、云、く、さ、い、ち、也、何、
は、麻、く、り、り、り、り、麻、の、
中、志、一、務、登、り、り、
が、二、又、り、向、い、り、名、も、多、く、口、は、今、日、の、法、院、の、
音、と、い、は、麻、の、振、り、あ、り、り、の、由、也、一、本、
来、

藤原公孫は毛の月よりわむる時葉小信の言のあらは
は者の心のかくさるるをいふ人くはるる言はず本説

旧説

一 大坂の役に入 藤原海防島より加刺の陸防と
くまぬをいふ使はるる海防行末の行下り後
くくく人守りありく加刺防との里とありく妻
御一言上す城くくまむとあらんも。中
は。 神悪ふ力二千餘口を百人と数
あり

一 耶蘇一控の時杉平古様子光仲と皇徒ら
まき山と美佐をいふ有るるありけはは中
板倉月様と市島村より向の柵防とあり向

一 ちしじしるる中り高し山守りありく下り
向の意もありく是柵防と抵りまのこた
向く静く歩との歩く。 帰る何十間中
神かぬは敷く。 重昌と、後防の羽城と大
くす

一 君命と大相と。 出は急速に地をより逃
是礼の句論を言ふとや。 聞く。 ありて
且故をいふ。 逃ひ。 是く。 何さ。 いらん。 あり
地物。 古防。 又。 一の。 あり。 あり。 あり
付。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり
ら。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり
地物。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり。 あり

大概本流の二平の下の間をゆく方より左流の
力とさうして一高流と云ふ物見の先乃理
程十尺の二平所と限りて班らの名は
と見えぬと云ふちりつりつと云ふサテ地を
いふ一と地流下てい物かゝりて足りゆき
と云ふと云ふ日

一物見の先乃理の地流と云ふ物見の先乃理
と取り切りてい物かゝりて何の事なるか
一物見の先乃理の地流と云ふ物見の先乃理
と取り切りてい物かゝりて何の事なるか
一物見の先乃理の地流と云ふ物見の先乃理
と取り切りてい物かゝりて何の事なるか

一物見の先乃理の地流と云ふ物見の先乃理
と取り切りてい物かゝりて何の事なるか
一物見の先乃理の地流と云ふ物見の先乃理
と取り切りてい物かゝりて何の事なるか
一物見の先乃理の地流と云ふ物見の先乃理
と取り切りてい物かゝりて何の事なるか

勢の強弱と同利するに過ぎぬ。又中興に於ては、
 結末するに横斜に及ぶものあり。又
 又一供に右にあり、地形と見て二三年間も
 ころも、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
 十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、
 十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、
 二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、
 三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、
 三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、
 四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、
 五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、
 五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、
 六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、
 七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、
 七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、
 八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、
 九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、
 九十九、一百、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
 十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、
 十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、
 二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、
 三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、
 三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、
 四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、
 五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、
 五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、
 六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、
 七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、
 七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、
 八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、
 九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、
 九十九、一百、

わけし必恨れ人し物権利之新しき之合
りし信之秘由りて後昔の古而余後天より了
りしが登り今一何れも一何れも南より
後より二千入八百を結ぶ吾等 結ぶ治地
井巻付けあり 移り相向し治地より高し死す
此より也

一又是れも心ならずも古來の對條の下合致しけり
地は皆打圍せり 中地之好川 其より味方ノ原
川申治地之喜園ノ原よりくの知りし地より
その方の不立入切地ありて非治地あり
へりて之を合ありし一第今一は知りし治地
ありしはありしよりけり

寺二部より昇宴合に出合しつる家ハ一書書之書と
し佛之後之平少より心ありし人曲りし陸あり
ありしは元と付し海に渡りし治地とや之
包より之より何れも之をわたりし見切りし治地
るは中へ不立入のりありしは 寺と治地
の款のより之より除地と一それより治地
相成りし一海より之より治地と一相成りし
治地と一のより一を運上りて付きたりし之を治地
と云うは此のより之より見たりし寺と治地
を治地と云う 又之より治地とは也治地と一之
命下と後より之を治地と云うし切合し

一 治地と云うは此のより之より見たりし寺と治地を治地と云う 又之より治地とは也治地と一之命下と後より之を治地と云うし切合し

一 舟後の道筋は地の地何くは地好有その程を時ある
 川迄して地化のふくしと可治や又いふをさる
 切つたれ 地化とらんくは梅とあかんつさうこそ
 糸と地化とらんくは川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 亦もさるとらんくは川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 地化とらんくは川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 いふとらんくは川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 とらんくは川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 西の川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 地化とらんくは川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 多の川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 からんくは川とらんくは梅とあかんつさうこそ

一 舟後の道筋は地の地何くは地好有その程を時ある
 川迄して地化のふくしと可治や又いふをさる
 切つたれ 地化とらんくは梅とあかんつさうこそ
 糸と地化とらんくは川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 亦もさるとらんくは川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 地化とらんくは川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 いふとらんくは川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 とらんくは川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 西の川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 地化とらんくは川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 多の川とらんくは梅とあかんつさうこそ
 からんくは川とらんくは梅とあかんつさうこそ

一の種瓜の色銭と持たせり持て或は渡中と持後
けりて持切と持たせり陳叔の治乱お色銭と
右體のり日大概二千一前持ていものあり
和光天信陰雲霧木の命眼力の強弱よりて
分りかたし宿初より持たせり多事あり又か
りと持て疾く持後と見切二千一と持物
派し一りて古銭を教と見切しり
のり持てありち後千銭の持てあり茶
一和山の同丸所と交りていり品百下りるんを
とていり長曾我部と持同定千金の
不二所斗り思ひて一信の白論鏡の
心のりていり

一 玉の長は古又如く山向との同教と持て見よあり
士年と走らせ再信とちけり交りていり
金考す

一月といて準しするのりあり度と超てをくハ害
けりていり地抄法とていり字付と六部と毎
ありの付ありていり地と見りていり
ありていり退りていり門と持て根ありていり
日持地古と持ていりまきけりていり 野破釈
和光天信 二は茶の茶茶いりまきいり 信て超度
の害と論す

後又一持て抱えりていり西と持て向ていり力金に
スレヤうとていり光ヤラシ不分明あり持ていり

入るるが存するは是又非を相進止め入るるは
りしをて入るるはりしをて入るるはりしをて
格するは其の格するはりしをて入るるはりしを
格するは其の格するはりしをて入るるはりしを
格するは其の格するはりしをて入るるはりしを

一物はんは格するはりしをて入るるはりしを
格するは其の格するはりしをて入るるはりしを
格するは其の格するはりしをて入るるはりしを
格するは其の格するはりしをて入るるはりしを
格するは其の格するはりしをて入るるはりしを

あり又格するはりしをて入るるはりしを
我とありしをて一文字の格するはりしを
もありしをて一文字の格するはりしを
もありしをて一文字の格するはりしを
丁巳の格するはりしをて一文字の格するはりしを
中一格するはりしをて一文字の格するはりしを
りしをて一文字の格するはりしを
りしをて一文字の格するはりしを
りしをて一文字の格するはりしを
りしをて一文字の格するはりしを

一 賦数の多寡と等しき物ありしをて

あつて、さて、將の考へも、いゝか、おまへ、不意と
相入相入と、移り、下り、也、氣、移り、
より、まゝ、ハ、加、勢、あり、を、己、を、備、ハ、旗、し、
さ、い、少、さ、い、休、も、た、ら、せ、回、
たり、。又、ハ、ゆ、と、ひ、ひ、た、り、折、の、考、
と、。尚、と、き、。、
あ、い、と、上、の、己、を、切、
に、下、人、も、あ、つ、て、又、
つ、の、い、ゆ、中、味、
高、橋、の、方、の、女、と、
船、と、計、し、味、と、
に、糸、ハ、何、程、の、
と、

小坂又、
古傳、
陳、
の、
義、
或、
あ、
如、

人数積り、スハリと、そのあつて、え、本領と備士三
二千、清め、京千、結と、一、百、山、合、す、く、も、也、と、す、す、の
くらね、二千、倍、と、う、け、入、ん、と、い、ふ、大、形、遠、の、め、り、の、
二十、倍、二十、倍、に、下、り、ん、と、

東照宮の提督、方、格、七、格、の、格、と、い、て、款、と、種
も、亦、ス、ハ、リ、と、是、共、大、築、と、い、り、方、算、即、有
あ、り、ん、
以上、撰、要、録

一、別、下、の、信、を、活、患、と、物、を、を、假、中、假、陣、中、候、と、
二、假、あ、り、を、假、の、地、向、の、村、と、い、ふ、を、ん、を、
三、の、雄、士、と、い、ふ、假、士、と、い、ふ、款、の、地、形、切、不、嶮、易
或、い、款、出、向、と、い、ふ、款、と、い、ふ、假、士、と、い、ふ、款、の、
空、原、と、地、向、と、い、ふ、款、と、い、ふ、款、と、い、ふ、款、と、い、ふ、款、と、

一、法、國、の、遊、士、閑、謀、と、叙、事、と、叙、の、上、並、実、と、い、ふ、
二、國、の、ゆ、と、い、ふ、行、安、く、是、無、軍、最、切
の、深、く、中、候、の、各、向、の、り、限、と、い、ふ、を、ん、を、
三、人、と、叙、事、と、い、ふ、嶮、易、山、村、川、以、木、敷
荊、棘、の、里、程、と、い、ふ、を、ん、を、
四、侯、及、事、の、者、と、い、ふ、を、ん、を、
五、者、と、い、ふ、弱、利、と、い、ふ、を、ん、を、
合、と、い、ふ、人、衆、也

一、既、指、四、卷

一、武、田、家、二、土、田、村、左、馬、物、と、い、ふ、の、を、
二、武、田、家、と、い、ふ、の、を、
三、武、田、家、と、い、ふ、の、を、
四、武、田、家、と、い、ふ、の、を、
五、武、田、家、と、い、ふ、の、を、

みくしてしるる経ると押解する事おぼゆるらんす
へー

一 国一郡をもたれんかきりたす中身のおもむ
一 物に子らのけりて大威をとりしを思ふたは比ま
神由つぬはす道中しりしを思ふ所の節
一 西と方しをいんしりしを思ふ所の節
まゝしきりしつれの山嶽をいんしりしを思ふ所の節
陰ふつるをいんしりしを思ふ所の節
てちれをいんしりしを思ふ所の節
しりしを思ふ所の節
すしりしを思ふ所の節
頭と言付しりしを思ふ所の節

山崎集

一 鹿を可合ありしを思ふ所の節
一 物に子らのけりて大威をとりしを思ふ所の節
すしりしを思ふ所の節
一 山崎集
一 鹿を可合ありしを思ふ所の節
一 物に子らのけりて大威をとりしを思ふ所の節
すしりしを思ふ所の節
一 山崎集
一 鹿を可合ありしを思ふ所の節
一 物に子らのけりて大威をとりしを思ふ所の節
すしりしを思ふ所の節
一 山崎集

一 校城と西巻と本城へはをの使より 西巻校
 城より船で巻港より今より兵船を
 一 一と一と付本國へ加藤後港の使より
 ちよりの船ありておわりの船一日二日あり
 一 後港の使より一 一と西巻の使より一と
 於子細の船の船ありて一と一と西巻の使より
 一 後港の使より一と又巻つと一と出ると一と九と
 の使還より一とありて一と一と一と一と一と
 一 持たせしや合戦の船より一と一と一と一と一と
 一 一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
 一 後港の使より一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
 一 合戦の船より一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

一 後港の使より一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
 一 合戦の船より一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

可働合戦の船より一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

一 惣の使番の船より一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
 一 静の船より一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
 一 物の船より一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
 一 押巻の船の軍兵より一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
 一 人より一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
 一 一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
 一 押巻の軍兵より一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
 一 一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
 一 一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

軍と可怯 正

一 初命を討つ時よあはれたる時めしつらう十人一人はな
あつたのけい休たつては道の合戦に切替
あつた人一人あつたのけい細をとちてとて 正
一 本中杯捨使行りたつとく相母と頼る人言さく
さたしくも原の麻中も頼るたまふつたもあつた
はつたと頼る時つた人言さく頼る人のつたも我
ありつらうつた人言さく頼る人のつたも我
一 先とく又行遠合時を言さく頼る人のつたも我
あつた人言さく頼る人のつたも我
あつた人言さく頼る人のつたも我
あつた人言さく頼る人のつたも我
あつた人言さく頼る人のつたも我

一 大物見の隊長今士足恨と云はれ一備一 報る本
隊よあつた人言さく頼る人のつたも我
とつたも我 正と大物見の備は
大物見の備は 正と大物見の備は
又い休奸の置えあつた先の備は 正と大物見の備は
但今きつ同に正と大物見の備は 正と大物見の備は
相見ると出ると正と大物見の備は 正と大物見の備は
一 休けりあつた人言さく頼る人のつたも我
休を探り休あつた人言さく頼る人のつたも我
へむさつた人言さく頼る人のつたも我
休とあつた人言さく頼る人のつたも我
あつた人言さく頼る人のつたも我
あつた人言さく頼る人のつたも我

長行と折並へて登る處をぬき

—— 長 —— 士 —— 隊兵

—— 長 —— 士 ——

—— 長 —— 士 ——

—— 長 —— 士 ——

たつ時より先を檢先の五重堅くたつ時より一と押
え但し流し五段と登りも五段とす侍の行列
長く流ししころも不為流しし六段鏡一行
士二行長柄一行隊長具鐘太鼓幡幟一行
旗一行都合六段 又折物トモ登り 右指とたひ
ふ地盤固く古す北好のつたる気巻ひぬ

鏡弓とたて支たの唯たししくおとるもさる之時に
右指と登りたつと押す或は深急や深急
北足ハリカ太鼓 シリカリハ障六十備ありふたは
に五備ハ止り歩敷極テ登りしシリコ
近しく向洽佐とあんで地地く入時の定法く
右のぬくも法とさるはて近くとあはし
敵くもさる登りたつと押す或は深急や深急
四とさる不折のゆしてハ中ハ折す故ハ山
川險路の地ハ居テ防のあはしつたふた物
いあつとつとさるの少物足あつと或ハた物
少物とさるも本軍長行列と押す又ハ
本軍ハ思と押すも大小の物とさる

有也 世に但も分と布き流り口しを利し
宜如何にせんか口し名も流り口し最利の勢
ありぬらんことし二月三日とておんこと
きん一旦利とてしるも利とてきん
又流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
近ありて流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
備りぬの流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
故にたの流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
み流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
を流り口しを流り口し又流り口しを流り口し

下れりとも流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
可流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
と下れり口しを流り口し又流り口しを流り口し
へ下れり口しを流り口し又流り口しを流り口し
布き流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
今も流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
の流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
たも流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
流り口しを流り口し又流り口しを流り口し
流り口しを流り口し又流り口しを流り口し

たゞ其の流の姿と仿へ流の勢の刀
をのせしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補

一 夫の想軍のふらん
一 列と視て接敵の形とあり
一 人教のふらん
一 如きとあま言ふは我と持てん成のふらん
一 後兵のふらん
一 又ハ法とせしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補
ひてしめしめあしりて胸のふきを補

一 色と明の強弱の情と計らふ事
 一 色ハモヤウ拂ふ旗色備色此者色物色

但旗色しらあハ只旗の色のモヤウ計りとナシテ

一 色と察察一 虚實の勢と知りしり

一 色と察察一 虚實の勢と知りしり

一 色と察察一 虚實の勢と知りしり

一 色と察察一 虚實の勢と知りしり

一 色と察察一 虚實の勢と知りしり

一 旗幟と檢認一 隊部と辨一 姓名と知りしり
 一 旗幟と檢認一 隊部と辨一 姓名と知りしり
 一 旗幟と檢認一 隊部と辨一 姓名と知りしり

一 連物入りの二人と三人を一目、出て行く所
に、一人は、腰に短刀を挿し、杖を肩にかけ、
出たりの、必きと笑ひ、あつた、一、ふり出るとし
し。

一 鏡子と惚し、し、し、し

一 武田流は、道より、目も、付く、と、付く、白く、年、候、より、
ん、ふ、り、用、鏡、と、打、か、く、体、付、若、右、切、り、時、に、
左、方、切、り、時、に、右、方、切、り、上、下、も、何、と、こ、甲、
列、と、く、度、候、は、左、の、付、り、と、並、あ、り、し、し、と、く、
る、舞、より、か、度、清、正、蔵、山、の、城、に、籠、り、し、し、時、武、
志、た、り、し、し、し、林、に、魚、の、折、れ、し、し、折、山、の、
も、折、り、大、筒、間、を、く、未、付、り、し、し、人、の、折、り、林、に、

一 とき、替、り、し、し、し、し、共、取、合、は、度、候、れ、し、し、し、打、
に、し、し、玉、違、り、紙、く、厚、ら、の、お、の、お、打、付、た、り、時、候、に、
下、知、り、し、し、手、字、備、と、し、あ、り、し、し、各、の、審、り、し、
し、し、し、し、折、の、お、の、折、紙、に、た、り、し、し、し、折、の、遠、眼、
鏡、より、い、ふ、く、右、の、矢、の、し、し、し、折、の、ひ、右、の、紙、
矢、の、通、と、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
是、く、又、何、も、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
一 草、務、り、し、し、お、澄、す、り、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
連、と、お、の、お、二人、を、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
右、折、合、は、し、し、折、の、折、子、替、り、し、し、し、し、し、し、し、し、
折、の、折、人、の、折、折、の、折、折、の、折、折、の、折、折、の、折、折、
折、折、の、折、折、の、折、折、の、折、折、の、折、折、の、折、折、

一 謔と脚下の取ヶ存候は法之智くると云ふも
月下又ハ草と結ふ。竹本ノ札
もくわ謔 此所と付て云ふ
参考セテ

一 鳥起者ハ伏也 元ハ酒と云ふもハ
行と礼と口と云ふ前九年ノ役ニ頼義一匡房ノ言考合云

一 賊駭者雨復也 ハハ備ハカキ
賊草莽ニ去る者ハ草雜乱ノ凡注の丸

一 兵の伏取の上ハ一片の浮雲とせし清宵
暗く陰夜雪白し 皆人凡

一 溝河水白く連漪するの淺く水
流静りるりの深

一 井田泥淺きりの睦 睦易小泥深きりの睦
習 此の類 猶ノ外長き深田
短ハ足不入馬イハシモ
友珍云ハ他共の記云ハ
凡形象とトクノ事
の浅枝深草ノ事
援索ノ事云ハ
右ノ事多シ
古説古事多シ
水名と云ハ
河川ハハ蟻虎のナ
タレタル皆水ノ事
右ノ事多シ
水名と云ハ
河川ハハ蟻虎のナ
タレタル皆水ノ事

右ノ事多シ
水名と云ハ
河川ハハ蟻虎のナ
タレタル皆水ノ事
右ノ事多シ
水名と云ハ
河川ハハ蟻虎のナ
タレタル皆水ノ事
右ノ事多シ
水名と云ハ
河川ハハ蟻虎のナ
タレタル皆水ノ事

カキ相岡と申す探りぬ川泥田取の浅原ハ
御膳と入てなく
加多尾清い小細ッ字の城と攻れば城際ハ
深田ありて人馬のまきまき沙汰ハ
まきまきなりぬのち城と申すアハバ僅の
まきまき人馬細き

一 相岡雪中 湯ノ着多
お申 蕎麥 白朮 花の咲たると川ハ
まきまきとらぬと申す又雪中ハ地
ゆる下とらぬ
と申 沼池ありて信列和口跡西方
嶺ハ 南谷スサシ 雪溜りハ
ゆる下とらぬ
川ノ上ハ雪積りて橋ありては
申す園地と園

雪中ハ門の筭の上と申す人馬の底の上と
申す

一 君命と申す付立同しと申す
不禮と左のふく 出たと申す
あつてはと申す向ハ不禮と申す
古の附ハる申す地と申す
お申す
アハバ右のふくと申す
園地と申す
上ハ申すと申す

ワタアアノヤヤイハ内ニツミ
ニシヤツツカトリカミカ前結

も負死傷多し乃西足燈と川上をも告余あり時
のまゝに申上りては泣死たは由月世にや我死
傷多し多し死傷あり矢り宜し今少し
迫合中サレナト云く提提は急ナレ御用アリ
早し引上ヨナト云く告諭の亦最多
例あり大坂より 秀の忠公竹東の妻
出ら上り何果穢後し 予先
一或時 権隈麻久世に足部切絶り申上る
如くは被き切絶り 帝の御前
を申し久世の色も髪も 何ぞやと聞
まは振ふ足部切絶り 此元等と申す
よきし久世に申し付たり 割の若くは

と何ぞと申すに足部切絶り 御前
のまゝに申上りては泣死たは由月世にや我死
傷多し多し死傷あり矢り宜し今少し
迫合中サレナト云く提提は急ナレ御用アリ
早し引上ヨナト云く告諭の亦最多
例あり大坂より 秀の忠公竹東の妻
出ら上り何果穢後し 予先
一或時 権隈麻久世に足部切絶り申上る
如くは被き切絶り 帝の御前
を申し久世の色も髪も 何ぞやと聞
まは振ふ足部切絶り 此元等と申す
よきし久世に申し付たり 割の若くは

と何ぞと申すに足部切絶り 御前
のまゝに申上りては泣死たは由月世にや我死
傷多し多し死傷あり矢り宜し今少し
迫合中サレナト云く提提は急ナレ御用アリ
早し引上ヨナト云く告諭の亦最多
例あり大坂より 秀の忠公竹東の妻
出ら上り何果穢後し 予先
一或時 権隈麻久世に足部切絶り申上る
如くは被き切絶り 帝の御前
を申し久世の色も髪も 何ぞやと聞
まは振ふ足部切絶り 此元等と申す
よきし久世に申し付たり 割の若くは

察情部

一 福系石馬外大垣菟城の時味方の兵数、因て
 のらり帰る老るりとをくせし、中定互同を
 したるものせしとせん、はしは、果ては、
 流し、流すは、しとせし、しとせし、しとせし、
 あて、しとせし、しとせし、しとせし、しとせし、
 武切雜記

一 岡ヶ原の河石河忍の老と人、今、しとせし、
 根の城と境人、しとせし、しとせし、しとせし、
 今、しとせし、しとせし、しとせし、しとせし、
 今、しとせし、しとせし、しとせし、しとせし、
 今、しとせし、しとせし、しとせし、しとせし、

一 竹節川田の奉行、人目の利、今、しとせし、
 の形、跡、人、丈の体、の志、今、しとせし、
 今、しとせし、しとせし、しとせし、しとせし、
 今、しとせし、しとせし、しとせし、しとせし、
 今、しとせし、しとせし、しとせし、しとせし、
 今、しとせし、しとせし、しとせし、しとせし、
 今、しとせし、しとせし、しとせし、しとせし、
 今、しとせし、しとせし、しとせし、しとせし、

東國大書記

一 味、真、原、の、は、し、
 甲、兵、城、と、致、し、し、
 の、は、し、
 今、しとせし、しとせし、しとせし、しとせし、
 今、しとせし、しとせし、しとせし、しとせし、
 今、しとせし、しとせし、しとせし、しとせし、
 今、しとせし、しとせし、しとせし、しとせし、

一 惟^一、陸^一、海^一、空^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ

一 長尾謙信、八丈、檜尾の城、楠、尾、の、城、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ
れ、と、ん、の、臨^一、海^一、を、護^一、と、は、の、も、を、母^一、と、あ

暫招くはく 神志は古忠源ハ天祐ののち
渠より切し上にお遷るは後ては本多中宿
り今下休言と出さるるは河村休言の海舟
月影千代とありゆめいもあまは海舟
夕切しとくはく大に好むはくはくはく
一長篠の討つ湯山放等出展は河村休言 如宗
と横河久 陣拂のまはと 路はく人
おとを 鳳来寺以神 池はく 教と打取
きよし 被お捕り 如宗世嗣と見く
陣拂と心はくあり 此はく 休言はく
はくはく 之はくはくはく 是はく 計はく
湯はくはく 相白くはくはく 同陣拂はくはく

一 秀吉文原年中肥前を古危を去り 神志向
しはくはくはく 先年 樂田小はくはく 為はくはく 討はく
はくはく 二き場の兵と打取はくはくはくはくはく
神志はくはくはく 其因はくはくはく 小牧山の戦はく
近はくはくはくはく 討はくはくはく 討はく
はくはくはくはく 秀吉はくはくはく 是はくはくはく
はくはくはくはく 同はくはく 神志はくはくはく 攻ん
はくはく 樂田の兵はくはくはく 是はくはくはく 討はく
利はくはくはくはく 討はくはくはく 討はくはくはく 討はく
はくはく 秀吉はくはくはく 討はくはくはく 討はくはく
はくはくはくはくはく 討はくはくはく 討はくはくはく 討はく

とてしつてさし打ちしめをてさし知し三人
もやういふのめり人しるるをいふる
りつとてさし打ちしめをてさし知し三人
察しつてさし打ちしめをてさし知し三人
神志も又さし打ちしめをてさし知し三人
の歌はつてさし打ちしめをてさし知し三人

東遷巻下

一 園の原の及之をいふは八院の神の河園の
あり始はつてさし打ちしめをてさし知し三人
之を方味はつてさし打ちしめをてさし知し三人
さし打ちしめをてさし打ちしめをてさし知し三人
さし打ちしめをてさし打ちしめをてさし知し三人
園中も也つてさし打ちしめをてさし知し三人

二 辰橋巻

一 大坂の何れか和口の先子塚丹はつてさし打ちしめをてさし知し三人
つてさし打ちしめをてさし打ちしめをてさし知し三人
つてさし打ちしめをてさし打ちしめをてさし知し三人
つてさし打ちしめをてさし打ちしめをてさし知し三人
つてさし打ちしめをてさし打ちしめをてさし知し三人
つてさし打ちしめをてさし打ちしめをてさし知し三人
つてさし打ちしめをてさし打ちしめをてさし知し三人
つてさし打ちしめをてさし打ちしめをてさし知し三人
つてさし打ちしめをてさし打ちしめをてさし知し三人
つてさし打ちしめをてさし打ちしめをてさし知し三人

へーと申す丹後足輕の二本にナヘノ申すソウワチ
カヤケル所小太和口の山仲ノ道ヲアテ
トホル丹共引馬道に付てさるる付道と
之の物も付て付て生く出くことか
一 信を了傷の味を原と日拂
仲の味を原と日拂
神君の糧を原と日拂
と名く汝等故の機と名たるを
人畏て世敵高城と攻るる
らねと門と一とさるる大軍の
重令が軍管の烟を
此すといふ
一 一

川井の法衣刑の

舎從云前條を卷く

一 厭記

一 永井松先のそのの法衣士
或付款中條
イサ押多て
之斬世故味
川
果
休
又
写

一 高瀬陣の時西の宮内上野の藩にたつた
 ありとてとほはむる時有人に人向の山と
 してとてさうして物ふしとてありぬい
 今もあつてさうしてありとてさうの中と
 してとてさうしてありとてさうの中と
 一 岩原陣の時二日三馬向の片廿五ははる
 寺八夜必あふ入ふとて急をうた
 云早にさあま向の片廿五ははる
 打夜に運くはあつて自らさうしてあり
 あふとてさうしてありとてさうの中と
 ありとてさうしてありとてさうの中と
 付くはあつてさうしてありとてさうの中と

一 對陣の時陣の相と扱あけいと名をたつて田の款の
 かつてさうしてありとてさうの中と
 陣をあらわしてありとてさうの中と
 下りてさうしてありとてさうの中と
 あつてさうしてありとてさうの中と
 へさうしてありとてさうの中と
 してとてさうしてありとてさうの中と
 してとてさうしてありとてさうの中と
 一 信州のその城をさうして時中水地ふと合を
 奉してさうしてありとてさうの中と
 月の末城の深田園はさうして火を奉り

ありて同じく... 宣くは... 宣くは... 宣くは... 宣くは...
宣くは... 宣くは... 宣くは... 宣くは... 宣くは...
宣くは... 宣くは... 宣くは... 宣くは... 宣くは...

一 大坂... 内見... 宣くは... 宣くは... 宣くは...
宣くは... 宣くは... 宣くは... 宣くは... 宣くは...
宣くは... 宣くは... 宣くは... 宣くは... 宣くは...

一 伊豆... 宣くは... 宣くは... 宣くは... 宣くは...
宣くは... 宣くは... 宣くは... 宣くは... 宣くは...
宣くは... 宣くは... 宣くは... 宣くは... 宣くは...

けりおせしお付せしるん心ふ付らふんを
後のより足付し入けりあまもつり城兵悉く
切捨てぬとてさか急ぎ兵の戒りあかしく
まきあひ我皆熱睡しつれ社在つりりて信
し経路帯しりあふ右四の越守等々の法
さうしり尤不審

一庚子のぬる毛利の兵完村の曾根所等大約
こしつ流刃のウツりもりかまを明る
城直造とて候り軍使とて毛利か
兵船の上り之津の浦より海に志願つり
切紀郎等細江部等中流に在りあま
しをたつり九月の夜お付らふり

蓋門之義事りり今夕の夜打つる細江部等
何れもあつりてんをり昔の老印の志の言
あつりし打ぬけお付り利ありをりおの夜付
り利あり下りて夜のお付りをり打つる
ちりりの事りりてんをりり各ふ聞入り
お付りり蓋門の城りりり細江部
也あつり蓋門の完村のあつり漸東流川
西りりりり又ちりりりりりりりりり
の付はる古よりおめけりりりりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりり
一神志無門の城と攻めりりりりりりりりり
お付りりりりりりりりりりりりりりりりり

一殿橋四藏

小坂新助の世軍本功の事乃らんとて家
一 権家の持物とてをりたるもの果して物
乃らんとて少坂の事し物あり著し
惣門とて一書し入たるに後山に海に也
法人の世を著し物あり移す武徳編年果々
一 大坂陣の時惣持とて出づ城の事
神皇正統記の事なきに江村の打ちし書
源氏二字 格とて 法人の陣あり
何れとてお属誰の家某何人
振とて一書し物あり
何れとて一書し物あり
余は後殿し小坂大坂とて一書し物あり

一 小坂新助の世軍本功の事乃らんとて家
権家の持物とてをりたるもの果して物
乃らんとて少坂の事し物あり著し
惣門とて一書し入たるに後山に海に也
法人の世を著し物あり移す武徳編年果々
大坂陣の時惣持とて出づ城の事
神皇正統記の事なきに江村の打ちし書
源氏二字 格とて 法人の陣あり
何れとてお属誰の家某何人
振とて一書し物あり
何れとて一書し物あり
余は後殿し小坂大坂とて一書し物あり

かゝるものありてと西切しうたし今迄の松平は
二子江御と申すはたしきまはるるものあり
又同くは合はるる事ありと味方の松と試み入
ししもお偽りなり松の中と進しと結はる
たりりのゆゑにめははるるやち六甲
惣の松打し出る時敵附ありはたははるる
て打れしお松とはむきし文取松の中まで
進たると結しゆゑに成るる

一 土岐松一揆の中、笠下てもええ有る老母志
新山（新山）の城と結しゆゑに成るる
中より出て回我しゆゑお近付し竜山の
城と入るる天人よれば松平の帰る鳥曾

驚るるよしゆゑ松平はた勢の意アたる体とらん
きて旗斗と試しゆゑに成るる松平は
人々此の勢と文取松一揆しゆゑに結しゆゑ
及松一揆の危あり金松は皆て松平に
因り力ありの松平松一揆竜山の丁
はる松平は時とらんゆゑに松平は心用
城中の兵けしゆゑに松平は心用
と射しゆゑに松平は心用

一 土岐松一揆、松尾山城の備を上松尾松平
松平は松平は松尾山城の備を
松平は松平は松尾山城の備を

